

経営協議会の学外委員からの意見を法人運営の改善に活用した主な取組事例 (平成23年度)

平成23年度の経営協議会において、学外委員からの意見を法人運営の改善に活用した主な取組事例は下記のとおりである。

記

1 これまであまり見られなかったが、藝大も社会へ打って出るようになり、それが着実に成果をあげ、良い方向に変わってきている。これからは国際的活動もいっそう進めていただきたい。
(平成23年6月23日 第36回経営協議会)

○ 特許技術を用いて世界遺産の石室を世界で初めて原寸大復元について

本学において独自に開発した特許「質感を表現した素材の製造方法及び絵画の製作方法、質感を表現した素材及び絵画、建築用材料(特許番号:第4559524号)」を用いて、世界遺産にも登録されている高句麗古墳群の中から、江西大墓(6C~7C)の巨大な壁画に描かれた「四神図」の複製に取組み、高度なデジタル画像処理技術の併用により30年前のフィルムから原寸大の鮮明な壁画画像を蘇らせ、石室全体の復元を世界で初めて成功した。また、この特許技術は、縦約3m×横約3.2m×高さ約2.3mの巨大な石室にある花崗岩の質感をともなった壁画の複製を短い制作期間で可能とする画期的なものである。

○ 藝大フィルハーモニアのCDデビューについて

藝大フィルハーモニア(音楽学部管弦楽研究部)が演奏した橋本國彦の名作「交響曲第2番」などを収録したCD「日本作曲家選輯 東京藝術大学編」をナクソス・ジャパン(クラシックレコード会社)から初めてリリースした。本CDは、演奏、指揮、バリトン・ソロ、録音・編集、楽曲解説及びCDのカバー・デザインに至るまで全て本学教員が制作し、ナクソスの世界的なネットワークにより、日本国内はもとより、世界60を超える国々に藝大フィルハーモニアを広く知らしめるとともに、本学の教育研究の成果を世界へ発信した。

2 これからどのような国の形を作っていくか、これまでは経済中心の体系できたが、これからは安全、文化芸術が中心となっていくべきかと考える。そのためには藝大はこれまで以上にもっと前に出て、国の予算に縛られることなく、世の中の人や海外からも価値があると認められるプロジェクトを、その体系作りも含めて実施してもらいたい。(平成23年6月23日 第36回経営協議会)

○ ナショナルアートライブラリー構想について

本学の知的創造拠点及び情報発信基地として大学美術館、奏楽堂と並んで、第3の芸術文化の発信拠点として、また、上野の杜文化ゾーン（本学、東京国立博物館、国立西洋美術館、国立科学博物館、東京文化財研究所、東京都立美術館、上野動物園、東京文化会館、国立近代美術館等）における共同教育研究利用施設として、ひいては我が国における芸術文化の発信拠点基地として、フランス、イギリスなどの海外の芸術文化施設と比較しつつ、ナショナルアートライブラリーの構想を取りまとめるため本学において検討部会を設置した。

3 JRで行った寄付講座が様々な発展をしていった経験を持つが、例えば、ヨーロッパにおける町のリニューアルの企画などは、様々な専攻を持つ藝大であれば、一大学だけで統一的なものができるのではないか。つまり藝大であれば、寄付講座の企画が出しやすいのではないか。（平成24年3月15日 第39回経営協議会）

○社会連携活動と連携した寄附募集プロジェクトの実施について

我が国の財政事情が厳しい折、本学の財政基盤を長期的に支え、もって本学における教育研究活動、社会連携活動の充実等に資するための寄附金の基盤整備等を推進するため、社会連携活動と連携した寄附募集プロジェクトを開始した。

なお、JRとの寄附講座等については、受託研究や受託事業を含め、寄附募集プロジェクトの一環として各種のプログラムを提案することとした。